

九州歯科大学

第六十一回卒業式式辞

式辞

本日、ここに、小川洋福岡県知事をはじめ、来賓各位ならびに保護者の皆様のご出席を賜り、第六十一回卒業式を挙行できますことは、卒業生はもとより九州歯科大学教職員にとっても大きな慶びであります。

ご多用中にもかかわらず、本日、ご臨席いただきました来賓の方々に厚く御礼を申し上げます。また、これまでの、成長を見守ってこられた保護者の皆様方に対して、教職員を代表して心よりお祝い申し上げます。

さて、六十一期生の皆さん、卒業おめでとうございます。今日の皆さんは、今、卒業証書・学位記を手にして、入学時から今日までの思いが去来して、感無量のことと思います。送る立場の我々教職員も、社会に貢献する歯学士に育て上げたという安堵感とともに、これからの厳しい実社会での成功を願う気持ちを胸に今日この場に臨んでおります。

皆さんは、先日受験した歯科医師国家試験合格の発表を受け、晴れて歯科医師の資格を得て、口腔保健医療活動に携わることになります。ただし、君たちは、これまでの歯科医学教育を通して診療に従事するための必要最小限の知識と技能を得たもののこれから先、生涯歯科医師としての臨床実践力とこれまで培ってきたプロフェッショナルリズムの精神を自らの手で高めていく必要があります。まず、これから始まる臨床研修のなかで、多くの患者さんに接し、精進することを心から願っています。

文部科学省は、平成二十四年六月に発表した「大学改革実行プラン」のなかで、大学に対して、生涯学び続け主体的に考える人材やグローバルに活躍する人材の育成を通じて、社会に貢献する体制作りを求めています。それに対して、九州歯科大学は、歯科医療を取り巻く環境が大きく変化しているなかで、専門的職業人育成という視点で、大学の理念に「高度な専門性を待った歯科医療人の育成」を掲げ、実践的な歯科医療人の育成教育を行ってきました。さらに、平成二十四年度からは、第二期中期計画のもと、我が国の歯科医療改革のエンジンとなるよう

な大学を目指して、歯科医学教育改革を継続し、新たな歯科医療人育成教育活動を展開しています。

皆さんは、我が国における歯科医学教育が大きく変化していくなかで学生生活を過ごし、さまざまな局面で戸惑いを覚えたことがあったかもしれません。しかしながら、今、私は君たちに対し、いかなる状況にあっても、自分を信じて、自ら考えて行動する社会人になることを願い、あわせて、今日をもって社会に船出する諸君に対し、高い志を持った歯科医療人として、社会で活躍することを切望いたします。

九州歯科大学は、平成二十六年五月十一日をもって創立百周年を迎えます。現在、県立大学から公立大学法人に変わりましたが、九州歯科大学は、設置団体の福岡県のもとで、全国レベルで活躍する歯科医師の育成を行っていくことに変わりはありません。現在、日本全国に九千人余りの卒業生が、地域歯科医療の牽引者として活躍しています。今日卒業する君たちも、これから全国各地で活躍し、本学のプレゼンスを高める活動をしてくれるものと信じています。

一方、福岡県は、アジアのゲートウェイとし

て様々な活動を行っています。そのようななかで、本学も、今年度に入ってから、ミャンマー、台湾、香港、タイなどのアジア諸国の歯科大学との連携を通じて、学生と教員の連携を強化する活動を開始しました。さらに、平成二十五年一月一日に、伝統ある九州歯科大学の英語表記を Kyushu Dental College から Kyushu Dental University に変更しました。これは、九州歯科大学が歯学部歯学科および口腔保健学科での教育研究活動を通じ、先に述べたように、アジア諸国、さらには、欧米の歯科大学と連携を目指し、グローバル化の道を歩むという強い意思表示と考えてください。

今後、すべてのライフステージにおける口腔保健の向上を通じて、国民の全身の健康増進を図るという歯科医療の新たな展開は、我が国のみならず、世界的レベルで求められます。このような認識のもと、諸君も栄えある Kyushu Dental University の卒業生として、歯科医療人としてグローバルな道を歩むことを強く望みます。

むすびに、小説家の司馬遼太郎氏が、その著書「竜馬がいく」のなかで、竜馬に語らせた「世

に生を得るは事を成すにあり」という一文を紹介し、そのうえで、私から卒業生諸君に、「我成す。ゆえに我あり」という言葉を贈ります。この言葉を胸に、皆さんがこれからの社会で活躍することを切に願って、私の式辞と致します。

平成二十五年三月十四日

九州歯科大学

学長 西原 達次